

■ 2003年カンボジア総選挙監視活動

カンボジア選挙監視ミッションに参加して

長嶺聖子（沖縄平和協力センター補助研究員）

はじめに

私は、去る7月27日に実施されたカンボジア国民議会総選挙監視活動に、インターバンドの一員として参加した。当初は、私の所属する沖縄平和協力センター（OPAC）からも数名が参加する予定であったが、諸事情により沖縄からの参加者は私一人となってしまった。昨年11月に立ち上がったOPACでは、沖縄の平和を希求する心を具体的な行動にすべく活動を行っており、その一環として途上国からの留学生を対象とした平和構築に関する研修を行っている。私も何度かその研修に携わってきたが、私自身が実際に途上国の現状に触れたことがなく、もどかしさを感じるがあった。また、受入れとは別の立場から国際協力を考え、そしてN G Oの役割を確かめてみたいという思いから、今回のカンボジアミッションに参加することになった。

選挙プロセスについて

ブルメリアの咲き乱れるプノンペン市内は、私の想像とは異なり穏やかな印象を受けた。以前旅先のインドネシアで見かけたような、派手な政党のポスターや垂れ幕を見かけることもなく、時折すれ違う政党の車を見かけることで選挙の存在を感じることができる程度だった。

今回の選挙は、1993年 UNTAC（国連カンボジア暫定統治機構）主導のもとに行われた初の選挙からちょうど10年の節目となるものであり、カンボジアにおける民主主義の定着を図る機会となった。実際この国では着実に民主化が進んでおり、UNTAC時代の遺産として一連の選挙プロセスもマニュアルに沿って丁寧に進められているように思えた。もちろん、不正や事務作業の不効率性等さまざまな問題は依然として残されているが、目立った暴力事件もなく、前回までの選挙と比較して、脅迫件数も確実に減少していた。

私が参加したチームは、プノンペンより車で1時間ほど南下したところにあるコンポンスプー州にて監視活動を行った。カンボジア唯一のリゾート地であるシアヌークビルへの通過地点であり、よく整備された国道4号線沿いに広がる穏やかな農村地帯である。

ここでは、特に大きな事件もなく円滑にキャンペーンが行われていたが、台風の影響で雨が降り続き、浸水による被害が深刻な問題となっていた。25日の段階で選挙用物資の運搬が済んでいない投票所が2箇所あり、ヘリコプターの出動を余儀なくされた場所があれば、予定していた投票所が浸水のため使用不可能となり、急遽ブルーシートで覆われた仮設の投票所が用意された場所もあった。投票日が雨に見舞われることはなかったものの、浸水は物理的な問題として投票率へ影響を与えていた。

このような今回の状況は、この国の現状を物語っているように思える。明らかな武力や暴力に怯える時代を乗り越え、生活の向上に対する積極的な働きかけが求められている中、社会的、政治的な公正の不在や貧困に伴う問題が彼らの生活を左右し、開票作業における不効率性といった技術面の遅れが選挙における課題となっていたのである。

インタビューを通して感じたこと

コンポンスプー州では、インターバンドによる除隊兵士支援プロジェクトが行われており、現地スタッフの協力を得て、除隊兵士の家庭を中

心にインタビューを行うことができた。土地勘のあるスタッフとともに活動を行うことで、効率のよい活動展開ができ、すでに築き上げられた信頼関係の下、インタビューの内容も深いところまで踏みこむことができた。

インタビューでは、誰もが脅迫を受けることなく、自分の自由な意思で投票が行えると答え、ほとんどの者がすでに支持政党を決めていた。

一方、支持政党に対する熱い思いを語りつつも、「実際に投票するかはわからない」者や、脅迫を受けている他者が周りに存在する者、「自由に投票を行えるが、選挙の話は自由に行えない」者もあり、選挙を控え周囲の目を異様に意識し、ナーバスになっている様子も覗えた。

しかし、両者に共通していた点は、選挙に参加することに責任と重要性を感じていることであり、そこには投票することへの誇りさえ感じられた。新しい政府の誕生や現政党の改善など、票へ託された思いは異なれども、誰もが新しい生活への期待を抱き、文字通り国づくり、そして政治へ参加していた。

投票日当日、スタッフは皆威厳にあふれ、各政党からの代理人も真剣な眼差しで準備を見守っている。緊張が高まる投票所内の様子とは裏腹に、外では笑顔の住民が開場をまっていた。小奇麗な服装に紅をさした女性たちや、初めての選挙に顔をこわばらせた青年、彼らの表情からは投票日を心待ちにしていた様子が伝わってくる。これまでインタビューしたどの住民も選挙への参加を即答したことからもわかるように、彼らにとって選挙はまざれもなくハレの日であり、私自身、監視員として今回の選挙に関わることができた喜びを心から感じた瞬間だった。

投票終了後、各政党代理人が待ち構える中、投票箱が慎重にバイクの荷台に載せられた。これまで晴れ渡っていた空から、雨が落ち始め一気にスクールへ。投票箱を運ぶバイクの群れは、ひたすらカウンティングセンターを目指した。細いあぜ道を牛飼いの少女たちの視線を浴びながら、バイクは進む。遠くの青空と一面に広がる緑、そして雨の中輝く銀色の投票箱。彼らの希望と強い思いがたっぷりと詰まった投票箱をみつめていると胸が熱くなった。

[カンボジアの現状から](#)

今回のミッションでは、選挙監視活動とは別に除隊兵士支援プロジェクトに関するインタビューにも立ち会うことができた。中でも印象的だったのが、果樹園のオーナー宅にて居候をしながら、ビジネスを行う母娘へのインタビューだった。インターバンドによる支援が決定した後、除隊兵士である夫を交通事故で亡くし、実質 2 人でビジネスを進めることになったという。当初はマーケットの近くで野菜を売っていたが、居候という立場上、行動範囲が狭められ、現在では敷地内で行える飼育業に力をいれていた。彼女たちのビジネスは細々とはあるが、着実に生活を向上させていた。しかし、未だ借金が残っているのが現状であり、貧しさに変わりはなく、母親は娘に高等教育を受けさせてあげることができないことを悔やんでいた。

15 歳という移行期特有の不安定な状態で、自らの置かれた状況を受け止め、かつ将来が見通されることは、とても酷なことである。結果として将来に希望を見出すことができず、はにかみながら微笑む彼女の瞳から、私は目をそらすことができなかった。

平和について考える視点は多岐にわたるが、私は子どもたち個々の未来にポジティブな選択肢が存在することがそれにあたると考えてい

た。わずか 15 歳の少女が多くのをあきらめなければならない現状を目の当たりにし、今後この国に必要とされているもの、平和構築の過程において力をいれるべきものについて考えさせられた。

スクールの中、人々の思いを乗せて進むバイクの後姿と 15 歳の少女の瞳。「政府を改善するために投票にきた」と力強く語る老人の姿と、小さな農村の家屋にくっきりと残る浸水の痕跡。今回のミッションを通して私は、人々が抱く自国への期待と現状のギャップを垣間見ることができた。同時にそれは混沌とした途上国の現状であり、沖縄を訪れる研修生の背負っているものと結びつくのだと感じた。

[▲ Page Top](#)